第二章　玉鬘の物語　大夫監の求婚と筑紫脱出

［第一段　大夫の監の求婚］

*大夫監（たいふのげん）とて、*肥後国（ひごのくに）に族（ぞう、一族縁者が）広くて（多く居て）、かしこにつけてはおぼえあり（その地方に於いては名の通った）、*勢ひいかめしき（隆盛著しい一家の）兵（つはもの、軍人が）ありけり（いました）。　*「大夫監」については、注に「げん」は＜大宰府の判官。大弐、少弐に次ぐ三等官で正六位下。＞とあり、「たいふ」は＜特に従五位下に叙せられたので「大夫」という。＞とある。「たいふ」は＜五位の者の通称＞とある。地方豪族で名目上の高官には就けないが、農商の財力および兵力は有って、その実力および多額の献金を以って朝廷に忠誠を認められた地位の高い人、といったところなのだろう。　*「肥後」は今の熊本県に当たる地域。大宰府の筑前からは筑後を挟んだ更に南の地方だが、其の一族から大宰府の三等官という現地代表を輩出した勢力、ということだろうから、西海道の北部一帯に影響力があった実力者とも言えそうだ。　*「いきほひ」は＜威力、勢力、権勢＞および＜形勢、様相＞であり、＜武力＞や＜闘志＞それ自体ではなく、その一族の農業生産力や人口増加およびそれに基づく地域内の総合的な＜支配力＞を示しているのだろう。　*「つはもの」は＜武器、武具＞または＜武士、兵士＞とある。「武士」はこの時代では階層を意味しないので＜武官＞という職掌を表すが、大宰府は朝廷の出先機関ながら、軍の指揮権を有する独立政府の面との均衡の上に運営される特別組織であり、そこで実際に地元の兵士を動員できる司令官は軍部を代表する軍人参議である。

*むくつけき心のなかに（野蛮な無骨者ながら）、いささか好きたる心混じりて（少し風流めいた色気を出して）、容貌ある女を集めて見むと思ひける（見映えの良い女を集めて見たいと思ったのです）。この姫君を聞きつけて（そこで、この姫君の噂を聞きつけて）、　*「むくつけし」は＜厭わしい、嫌だ、気味が悪い、恐ろしい＞と古語辞典にある。また、大辞泉には＜無骨な、無作法な、無風流な＞ともある。詳しい説明は手元の資料には無いが、多分「向く付けしい」で＜無作法で強引なさま＞なのだろう。当時の都の上流社会の常識では、特に女に対して男は直接顔を見ないことが礼儀だったらしいから、「向く＝面対」「付け＝強いる」「しい＝態度」は余程＜無作法で汚らわしいもの＞だったのだろう。強引に面会を強いたのなら、光君だって朝顔君などに随分迫っていたが、高貴な人には「むくつけし」は使わないようだから、やはり少なからず賤民蔑視の身分意識から見た＜野蛮＞という評価を含む語なのだろう。だから、それに対する反語として表された「好きたる心」という語には＜文化人を志向する部分＞という京都人から見た上から目線での歓迎気分が込められている、ように意図して記述されているようだ。

「いみじきかたはありとも（ひどく見苦しい片輪者であっても）、我は見隠して持たらむ（私は目を瞑って世話したい）」と、いとねむごろに言ひかかるを（わざと親切めかして言い寄って来るのを）、いとむくつけく思ひて（乳母は心底心外に思って）、

「いかで（一切）、かかることを聞かで（そうしたご縁談は受け付けず）、尼になりなむとす（孫は出家を決意しております）」と、言はせたれば（人を介して返事を言わせると）、いよいよ*あやふがりて（監はますます気が済まなくなって）、おしてこの国に*越え来ぬ（断られたのも構わず自ら進んで筑前から国境を越えて肥前に遣って来ました）。　*「あやふし」は＜危うい、気懸かり、不安になる＞とある。落着しない事案を＜気に病む＞とも言えるのだろう。　*監を大宰府に常駐する者と考えて、肥後ではなく筑前から国境を越えて来た、と読む。また、肥後から肥前なら水路もありそうで、この記述は陸路に見える。

この男子どもを呼びとりて(そして乳母の子息たちを旅宿に呼び寄せて)、語らふことは(語り掛けた事には)、

「思ふさまになりなば(思い通りに御孫を私の妻に出来れば)、同じ心に勢ひを交はすべきこと(貴家とは同じ一族としてお付き合いすることになるわけです)」など語らふに(などと云われて)、*二人は赴きにけり(三人の内の二人は同調したのです)。　*「ふたりは」とあるが、前に「男子三人あるに」との記事があった。ただ、三人が同席したのか、一人は他国にでも居るのか、それは長兄か末弟か、そうした事情は不明。「おもむく」は＜向かう、従う、なびく、同意する＞とある。実態は＜従う＞に近いかと思うが、かつての上司の家柄である子息の立場からすれば＜同意＞だろうか。

「しばしこそ(初めの内こそ)、似げなくあはれと思ひきこえけれ(監理官のような地方者は身分違いで姫には可哀相な取り合わせと思い申していましたが)、おのおの我が身のよるべと頼まむに(我々自身が後ろ盾と頼むには)、いと頼もしき人なり(とても頼もしい人物です)。これに悪しくせられては(この者に嫌がらせを受けては)、この近き世界には*めぐらひなむや(一族の勢力が強いこの辺りでは暮らしが立ちません)」　*「めぐらふ」は「廻らふ」で「廻って行く」の語感。「廻る、巡る」は＜回る、巡回する、周りを取り囲む＞などの他に＜同じように暮らす＝生き永らえる＞と古語辞典にある。

「よき人の御筋といふとも(高貴な御血筋と言っても)、親に数まへられたてまつらず(親に子としての世話をお受けになられず)、世に知らでは(世間にも知られないでは)、何のかひかはあらむ(何の意味がありましょうや)。この人のかく*ねむごろに思ひきこえたまへるこそ(監理官がこのように大事にしようと為さることこそ)、今は御幸ひなれ(今の幸運と言うものです)」　*「ねんごろに」は＜熱心に、手厚く、親しく＞など。

「さるべきにてこそは(そうした宿命があってこそ)、かかる世界にもおはしけめ(姫も当地へ来なさることになったのでしょう)。逃げ隠れたまふとも(言い逃れて隠れなさっても)、何の*たけきことかはあらむ(何も誇らしいことはありません)」　*「たけし」は＜勇ましい、強い、激しい＞の他に＜優れている、誇らしい＞と古語辞典にある。

「負けじ魂に(監理官が意地を張って)、怒りなば(剥きになった来たら)、せぬことどもしてむ(どうしょうもない無茶な事なども遣りかねません)」

と言ひ脅せば(とその二人が掛け合って言い脅したので)、「いといみじ(何と情けない)」と聞きて(とその話を聞いた)、*中の兄なる(なかのこのかみなる、三人兄弟の中の長兄である)豊後介なむ(豊後介という者は)、　*「中の兄」は注に＜兄弟三人の中の長男の豊後介の意。『完訳』は「この豊後介は任国に住んでいないらしい。任期が終って肥前国の小土豪と化しているか」と注す。＞とある。長兄は大夫監に反感し、次男と三男が同調したことが分かる。が、兄弟の実生活に付いての詳しい説明は未だに無い。「豊後(ぶんご)」は今の大分県とある。「介」は国司の次官で、豊後は上国とあるから、官位相当制では従六位上。ところで肥前も豊後も、国司が平城京朝廷に提出した国情報告書たる「風土記」が今に伝わるとされる5国(出雲、播磨、常陸、肥前、豊後)の内の2国ということに、作者が意図する何らかの参照事象の経緯や記号性は必ずや在ったのだろう。二条院から六条院への移動もそうだが、当時の読者には認知されていたであろう当時の事情やその意味は、仮に其

也の説明があっても現代人が共有できる筈も無いが、今は手元に何の資料も持ち合わせないので、その論理的な面白さすら読み取れ無い。ただ、何か在ると気懸かりなだけだ。

「なほ(まったく)、いと*たいだいしく(実に以ての外の)、*あたらしきことなり(不届きな事だ)。*故少弐ののたまひしこともあり(監の上司たる少弐であった亡き父上の御遺言も有る)。とかく構へて(何とか手立てを講じて)、京に上げたてまつりてむ(姫を京へお送り致さねばならない)」　*「たいだいし」は＜不都合だ、だらしない＞。　*「あたら」は＜本来の価値が損なわれて惜しい＞の語意で、「～であったら、良かったのに」の語感だろうか。　*「こせうに」と父親を役職で呼ぶのは、太宰監の上司たる家柄を自負して強調したのだろうか。いずれ、監を意識した言い方には違い無い。

と言ふ。娘どもも泣きまどひて、

「母君のかひなくてさすらへたまひて(母君様が手掛かりも無く姿を消しなさって)、行方をだに知らぬ*かはりに(行方すら分からないその身代わりの標しとしてでも)、*人なみなみにて見たてまつらむとこそ思ふに(身分相応に御育て申し上げようと堅く思ったのに)」　*「かはり」は「代はり」で＜身代わり＞だが、代償や代替ではなく其の人に辿る＜証＞なのだろう。　*「なみなみ」は＜一通りの様、普通＞といった同列の水準を意味する他に＜その分際、身分相応＞と古語辞典に説明されている。

「さるものの中に混じりたまひなむこと(太宰の監のような地方豪族の一員にお成りになることなど、在っては成りません)」と思ひ嘆くをも知らで(と嘆いているのも監本人は知る事も無く、次男と三男を手懐けた心算で)、「*我はいとおぼえ高き身(我はかの家では非常に評判の高い立場なのだろう)」と思ひて、文など書きておこす(姫に恋文を書いて遣します)。　*監のこの故少弐家に対する自負は、直接は姫との婚儀に付いて次男と三男を言い包めた事に拠るものだろうが、より広範な支配意識を感じさせて興味深い。この第二章の話の面白さは、第一章第三段に記された「この少弐の仲悪しかりける国の人多くなどして」一家が帰京も侭ならなかった、という事情が全ての下敷きになっている。監は地の有力者とあるので、少弐はこの監との確執が在ったのかも知れないし、少弐は他にも敵が多くて、寧ろその取り成しを監がしたのかも知れないし、恐らくは其の綯交ぜだったのだろう。で、年長の娘二人と長兄は父親の中央権威を尊敬したかったし、赴任当初は実際に其の威力もあったが、農産拡大期に在って都に遠いこの地では、年を追うに連れて地元の実力が物を言うようになった、という事情なのではなかったか。16 年も当地で過ごす内には、次男や三男には郷士に擦り寄って暮らしを立てる他の生き方は無かったのだろうし、一家も其れによって救われて来たからこその、監の自信なのだろう。受領の台頭が平安前半期に早くも武士階層の台頭として現れる大宰府ならではの特異性、のようにも今日からは見えるが、そうした後世の客観的視点など有る筈も無い実況報告として、地方の発展を中央の優越感で国力の隆盛として楽しんでいる反面、構造の変化を感じ取っている分析眼ないし着眼点を既に作者が持っていることに、少なからず感心する。作者の弥に今日的なこの記者魂こそが、この物語の基本的な生命線であり、それこそが歴史的な時代性だ、とは云い過ぎか。

手などきたなげなう書きて(文字は汚くも無く書いてあって)、唐の色紙(からのしきし、上質の唐紙に)、香ばしき香に入れしめつつ(薫り立つ香を焚き染めて)、をかしく書きたりと思ひたる言葉ぞ(いかにも風流を心得て書いた心算の監の文句たるや)、いと*たみたりける(ひどい訛りなのでした)。みづからも(そして自信満々に自らも)、この家の次郎を語らひとりて(この家の次

男を案内役に言い付けて)、うち連れて来たり(連れ立って遣って来たのです)。　*「たむ」は「訛む」と表記されて＜言葉や発音が訛る＞と古語辞典にある。

[第二段　大夫の監の訪問]

三十ばかりなる男の(三十歳くらいの男で)、丈高くものものしく太りて(背丈は高く堂々と太い体格の)、きたなげなけれど(見苦しくは無いが)、思ひなし疎ましく(田舎者と見る所為か品性に欠けて)、荒らかなる振る舞ひなど(飾らない態度が)、見るもゆゆしくおぼゆ(宮廷文化人の目には見るに耐えない感じです)。色あひ心地よげに(色つやの良い健康状態で)、声いたう嗄れてさへづりゐたり(声はひどく涸れて方言で喋り立てていました)。

*懸想人は夜に隠れたるをこそ(求愛者は夜に隠れて忍び込んでこそ)、よばひとは言ひけれ(名を呼ばないと分からないから、夜這いの求愛という言い方が在るので有って)、さまかへたる春の夕暮なり(是では随分風変わりな春の夕暮れの光景なのでした)。　*この文に付いては、注に＜以下、語り手の挿入句。『集成』は「夜こっそりやって来るはずの求婚者が夕暮にやって来たというのだが、大夫の監をいかにも馬鹿にしきった感じの草子地」。『完訳』は「「見ゆ」まで、監の求婚ぶりを揶揄する語り手の評」と注す。＞とある。確かに、この文は滑稽譚の口調だと思うし、それはこの第二章の全体の口調でも有る、と思う。「けさうびと」はいかにも＜求婚者＞という文意だが、この時代の概念では「懸想」は＜思いを寄せる＝恋慕する＞であり「情交」を目的とするので、当然に「婚姻」と関連は有るものの、寧ろ「婚姻」は「情交」後に確かめられた＜宿縁＞であり、それぞれ別々の事柄という認識だったようなので、この時点での言い換えは＜求愛者＞としたい。

*秋ならねども(今は春の夕暮れなのですから、秋ではないのですが)、あやしかりけりと見ゆ(ちょうど古歌に‘秋の夕はあやしかりけり’とあるように、この場面も‘あやしかりけり’と言ったところでした)。　*この文の言い回しは、注に＜『源氏釈』は「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり」（古今集恋一、五四六、読人しらず）を指摘。＞とある。必脚である。下敷き歌の「あやし」は＜秋の風情が綾を成して格別な深い味わい＞という意味だが、此処の文の「あやし」は＜奇妙で不恰好＞という意味、という複意表現。で、今すぐには具体例が思い付かないが、この手の洒落言葉は多分ほとんどの国の言葉に有るであろう、ヒトに共通の音感と発想方法のようだ、と何故か思う。

心を*破らじとて(それでも、地元の有力者である大夫の機嫌を損ねまいと)、*祖母おとど(おばおとど、オバアサマである乳母が)出で会ふ(応接します)。　*「やぶる」は＜壊す、砕く、傷付ける、負かす＞とある。乳母は本当は大夫に婚儀を諦めさせたいので、「心」を＜思惑＞と読めば寧ろ其れを＜壊したい＝破らむ＞筈なので、「破らじ＝壊すまい」とある此処の「心」は＜機嫌＞であり、「破る」は＜損なう＞となる、ようだ。*「祖母おとど」については、注に＜乳母をいう。世間体には祖母と触れているのでこういう。『集成』は「やや諧謔の気味がある」と注す。＞とある。「諧謔」が分からず、大辞泉で「かいぎゃく」という読みと＜こっけいみのある気のきいた言葉。しゃれや冗談。ユーモア。＞という意味を知る。

「故少弐のいと*情けび(亡き少弐の大変に教養が深そうで)、*きらきらしくものしたまひしを(堂々としていらしたので)、いかでか*あひ語らひ申さむと思ひたまへしかども(是非とも共に親しく話したいと存じておりましたが)、　*「なさけ」は＜思いやり＞でもあり＜情緒＝風流好み＞でもある。「なさけぶ」は＜人情に厚そう＞でもあり＜風雅に詳しそう＞でもある。但し、少弐の人柄は権威主義の横柄な態度

で田舎者を蔑んでいたらしい節が在って＜人情に厚そう＞と読んでは嫌味な皮肉になるので、乳母の立場では＜風雅に詳しそう＝教養が深そう＞と受け留める他は無い。が勿論、大夫には皮肉の内意が有るか、其の無礼にも気付かない田舎者か、という作者の含みは有るに違いない。　*「きらきらし」は＜派手に美しい、きらびやかな、際立っている、堂々としている＞とあるが、他を威圧する＜尊大さ＞にも通じるようだ。そして、少弐は尊大で威張っていたらしい節があって、表面上は＜堂々としている＞と読む他は無いが、だから土地の者に嫌われて遺族が苦労する羽目になった、という意味が誰にも読み取れる言い回しとなっている。　*「あひ語らひ」は「相語らひ」で＜互いに親しむ＞という意味なのだろう。恐らく同格同士か男女間で用いるべき語で、部下が上司に言える言葉では無く、大夫の常識の無さを演出している、ような気がする。是は丸で当てずっぽうだが例えば、都人なら「いかでか語らひ聞こえむ」と言うとか。いや、とても私などには正確な理解は覚束無いが、此処の大夫の口調は相当に田舎者を演出した言い回しに違いない、と思えてならない。

さる心ざしをも見せ聞こえずはべりしほどに（そうした意向をお知らせ申さずに居りました内に）、いと悲しくて（大変残念ながら）、隠れたまひにしを（お亡くなりになられたので）、*その代はりに、一向に仕うまつるべくなむ（御遺族に精々忠節を尽くそうと）、心ざしを励まして（一念発起して）、今日は、いとひたぶるに（万事を省みず）、強ひてさぶらひつる（思い切って伺いました）。　*「その代はりに」からの文句が、何処が如何と言うより、頼んでもいない事を勿体ぶった言い回しで恩着せがましい事、この上ない。

このおはしますらむ女君（こちらにいらっしゃるという姫君は）、*筋ことにうけたまはれば（血筋が殊に高貴と承りまして）、いとかたじけなし（まことに恐れ入ります）。ただ（偏に）、なにがしらが（この私めが）*私の君と思ひ申して（内々の主君と敬い申し上げて）、いただきになむささげたてまつるべき（丁重にお世話いたす所存です）。　*「筋殊に承はれば」は、大夫が既に次男と三男から姫の素性を聞きだした事情を示しているのだろう。つまり、姫が参議の家柄だという事を大夫は承知している。　*「わたくしのきみ」については、注に＜内々の主君、個人的な主君。「公の主君」に対することば。＞とある。ところで、この言い方には覚えが有る。「箒木」巻の第三章第二段の＜紀伊守邸への方違へ＞で、紀伊守が空蝉を娶った親の伊予介のことを「私の主とこそは思ひてはべるめる」と評していた文だ。妙な言い方に思えて印象深かった。私が何に引っ掛かったのかと言えば、五位の伊予介が従三位参議中納言の家柄の空蝉を娶る際に覚えたであろう身分上の引け目が、今でもそうだが当時は更に、理解し難かったからだ。そして此処でも、五位大夫の監に対して参議家系の姫である。通常なら手の届かない高嶺の花が、姫の不幸な身の上ゆえに手が届きそうなのである。是を大夫に諦めさせるのは容易では無い。厄介な事態となった。

おとどもしぶしぶにおはしげなることは（祖母殿がしぶしぶでいらっしゃるようなのは）、よからぬ女ども（身分の低い女たちを）あまたあひ知りてはべるを（私が多数面倒見ております事を）聞こしめし疎むななり（耳にされてご心配なのでしょう）。さりとも（しかしながら）、すやつばらを（そんなやつらを）、人並みには（人並みになど）しはべりなむや（致すものですか）。わが君をば（この姫君こそを）、后の位に落としたてまつらじものをや（正妻の地位から落とし申すものではございません）」

など（などと大夫は）、いとよげに言ひ続く（全て善意のように説を述べます）。

「いかがは(それはそれは)。かくのたまふを(そう仰るのを)、いと幸ひありと思ひたまふるを(とても光栄に存じますが)、宿世つたなき人にや*はべらむ(孫は不運な人のようでして)、思ひ憚ることはべりて(婚儀には気の進まないことがありまして)、いかでか人に御覧ぜられむと(どうして人にお世話して頂けようかと)、人知れず嘆きはべるめれば(密かに悲しんでいるようですので)、心苦しう*見たまへわづらひぬる(残念ですがお話は進めかねます)」　*乳母は姫を「孫」と言い張っている手前、大夫が「女君(をんなぎみ、姫君)」と言って来ても、敬語を使わないままウソを突き通す心算らしい。　*「見たまふ」は＜お世話申す＞だが、姫への敬語ではありえないから、話し相手に対する謙譲語で＜取次ぎのお世話を申す＝お話を進める＞。「わづらふ」は＜～しかねる＞。

と言ふ(と乳母は言います)。

「さらに(それはもう)、な思し憚りそ(気に病むことはありません)。天下に(てんかに、この世で例えどんなにひどく)、目つぶれ(目は潰れ)、足折れたまへりとも(足が折れていらしたとしても)、なにがしは仕うまつり(私めがお役に立って)*やめてむ(治しましょう)。国のうちの仏神は(地元の仏や神は)、おのれになむ靡きたまへる(この私に味方なさるので)」　*「止む」は＜続いていた物事が終わる、決着する＞または＜物事が起こらずに終わる、中止になる＞とあり、他には特に＜病気や癖が治る＞ともある。

など(などと大夫は)、誇りゐたり(尊大にしていて、)。「*その日ばかり(では、もう婚儀はこの日ということに決めましょう)」と言ふに、　*注に＜大夫監の詞、間接話法、実際は何月何日にと言ったものである。＞とある。

「*この月は季の果てなり(今月は季節の終わりで縁起が良くありません)」など(などと乳母は)、田舎びたることを言ひ逃る(土地柄の風習を言い立てて言い逃れます)。　*注に＜乳母の詞、間接話法であろう。季節の末の月は結婚を忌む風習があった。＞とある。段初に「春の夕暮れなり」とあったから、「この月」は三月なのだろうか。

[第三段　大夫の監、和歌を詠み贈る]

下りて行く際に(おりていくきはに、大夫は帰り際に)、歌詠ままほしかりければ(歌を詠みたくなったので)、やや久しう思ひめぐらして(やや長い時間で思い巡らして)、

「君にもし 心違はば 松浦なる 鏡の神を かけて誓はむ　(和歌 22-03)

「啼くまで待とうホトトギス 鏡の神が居る限り　(意訳 22-03)

*「松浦なる鏡の神(まつらなるかがみのかみ)」は佐賀県唐津市の鏡山の麓に在る「鏡神社」のこと、らしい。Web 検索するとこの歌と鏡神社の関連ページが幾つかヒットする。「松浦」は唐津湾岸沿いの松並木に因んだ地名で、今でも松浦川に名が残る、ということらしい。ということは、長崎県松浦市は見当違いになるので、乳母一家の住まいは佐賀県唐津市を想定するべきかも知れない。ともあれ、この歌の「松浦」は「まつら」の音で「待つ」に掛かる、との事。で、「待つら(む)なる」と「誓はむ」のは＜私＞なので「心違はば」の未然形の意味は、(私が)＜心変わりしたら＞ではなく、(君が)＜不承知なら＞と知れる。また、「鏡の神を掛けて」の一意は＜屈んで祈る願掛け＞だろうが、「鏡の上」

には自分の姿が写るので、その鏡を立て「掛けて」祈れば自分の＜身を捧げる＞形に成る。だから歌意は、「君にもし納得できない事が在るなら私は何時までも待つと美しい松並木が在る鏡神社にこの身を捧げて誓います」みたいな感じで、謙虚と言うより執念深い歌、かと思う。

＊この和歌は、仕うまつりたりとなむ思ひたまふる（上手く仕上がったものと存じます）」　＊注に＜以下「思ひたまふる」まで、歌に添えた詞。『集成』は「「歌」と言わないで、「和歌」と言ったのは耳馴れぬ言葉づかいで、無骨な田舎者らしい感じであろう」と注す。＞とある。確かに、「つかうまつりたり」の「たり」には「したり」の＜してやったり＞感が演出されて、上手く出来た時ほど控え目にする文化人のイヤラシサを備えていない大夫の拙さが強調されるが、逆に言えば歌自体は本意を込めた会心作だったか。

と、うち笑みたるも（自慢げに上機嫌にしているのも）、世づかずうひうひしや（風雅に不慣れあな初々しさ、なんでしょうかね）。

あれにもあらねば（乳母は執念深そうな大夫の歌に気が気で無しに）、返しすべくも思はねど（返歌を考えようとも思わなかったが）、娘どもに詠ますれど（無視も出来ないので娘たちに返歌を詠まそうとしたが）、「まろは（私は）、ましてものもおぼえず（母上よりも更に何も思い付きません）」とてゐたれば（と黙っていたので）、いと久しきに思ひわびて（今度は返歌がとても遅くなることに気が揉めて）、うち思ひけるままに（思い付くままに）、

「年を経て 祈る心の 違ひなば 鏡の神を つらしとや見む」（和歌 22-04）

「殺されてしまうホトトギス 鏡の神を恨みます」（意訳 22-04）

*注に＜乳母の返歌。監の「心違はば」「鏡の神」の語句を受けて「心違ひなば」「鏡の神をつらしとや見む」と詠み返す。「年を経て祈る心」とは、大夫監との結婚ではなく上京のことをさす。＞とある。ざっと、「長年世話をしながら祈って来た願いが適わないなら神様を恨みます」といった歌筋のようだ。「鏡の神」は＜鏡神社＞で＜屈んで祈る願い＞で＜身を捧げる＞だと既に見た。あと一つ、「鏡」には＜模範、手本＞の意味があって、京都人が田舎者を見下す優越感で、乳母は必死に大夫に抵抗を試みた、とも読めそうだ。その深層の気負いが、自分でも意外なほどの緊張感を持って口を吐く。

とわななかし出でたるを（と震え声で返歌したのを）、

「待てや（おや、ちょっと）。こはいかに仰せらるる（それは如何いう意味ですか）」

と（と大夫が）、ゆくりかに寄り来たるけはひに（ゆっくりと戻って近付いてくる気配に）、おびえて、おとど、色もなくなりぬ。

娘たち、さはいへど（そうしたところが）、心強く笑ひて（強気で笑って）、

「この人の（姫君に）、さまことに*ものしたまふを（難点がお有りなので）、*引き違へ（期待を裏切ったら）、いづらは思はれむを（殿に如何思われてしまうかを、悲観するあまり）、なほ（つい）、ほけほけしき人の（ボケ気味の老人が）、神かけて（神様にした御成婚の願掛けを）、聞こえひがめ

たまふなめりや(‘つらし’などと言い間違えなさったに違い有りませんよ)」　*「ものしたまふ(〜成っていらっしゃる)」と娘たちは姫に敬語を使う。これは姫に対する敬いというよりは、大夫の思いを尊重している姿勢の表明である。大夫殿の正妻になるはずの、姫君、と軽く追従して大夫の機嫌をとったワケだ。　*「ひきたがふ」は＜期待を裏切る、掛け離れる＞など。で、「ひきたがへ」を已然形の仮定条件の「ば」省略での順接で読むと、「いづらは思はれむを」は＜如何思われるのかを、悲観して＞と補語出来る。

と解き聞かす。

「おい(なるほど)、さり、さり(それは、それは)」とうなづきて(と大夫は頷いて)、

「をかしき御口つきかな(結構な御詠みっぷりですな)。なにがしら(私めは)、田舎びたりといふ*名こそはべれ(田舎びているという都から遠い人という言われ方こそあるが)、口惜しき民にははべらず(名も無い賤民ではござらぬ)。都の人とても(都の人といっても)、何ばかりかあらむ(何ほどの事も無い)。みな知りてはべり(私は何でも分かっております)。な思しあなづりそ(決して見下しなさいますな)」　*「名」は＜識別記号＞だが＜名ばかりで中身の無いこと、名目＞という見方もあるので、＜うわべの評価＝見掛けの言われ方＞でもある。で、「ゐなかぶ」は＜辺境めく＝客観的に都から遠く離れている＞。

とて(と強がって)、また(もう一首)、詠まむと思へれども(詠もうと思ったのだが)、*堪へずやありけむ(力が及ばなかったのでしょうか)、往ぬめり(そのまま帰りました)。　*「堪ふ」は＜困難な事態を持ち堪える＞の他に＜事を成す能力がある＞。

[第四段　玉鬘、筑紫を脱出]

次郎が語らひ取られたるも(次郎が大夫に言い包められたのも)、いと恐ろしく心憂くて(大変な事態で気が重く)、この豊後介を責むれば(乳母は頼みの豊後介に上京を迫ると)、

「いかがは仕まつるべからむ(どのようにお助けしたら良いものか)。語らひあはすべき人もなし(相談できる者も居ない)。まれまれの(わずか二人の)兄弟は(はらからは、弟たちは)、この監に同じ心ならずとて(私がこの監に同調しないからと言って)、仲違ひにたり(仲違いしている)。この監に*あたまれては(この監に敵視されては)、いささかの身じろきせむも(ちょっと身動きしようにも)、所狭くなむあるべき(侭ならない有り様だ)。なかなかなる目をや見む(逃亡に失敗すれば、大変な目に遭うだろう)」　*「あたむ」は「仇む」で＜憎む、敵視する＞。

と、思ひわづらひにたれど(思案に窮していたが)、姫君の人知れず思いたるさまの(姫君が人知れずお悩みのご様子が)、いと心苦しくて(とても痛々しくて)、生きたらじと思ひ沈みたまへる(死んでしまいたいと監との結婚を悲しんでいらっしゃるのも)、ことわりとおぼゆれば(無理も無いと思われて)、いみじきことを思ひ(此処が正念場と考えて)構へて出で立つ(一大決心をして京へ出立します)。

*妹たちも(乳母の娘姉妹の妹と他の女房や郎党たちも)、*年ごろ経ぬるよるべを捨てて(長年連れ添ってきた夫や縁者たちを捨てて)、この御供に出で立つ(この姫の御上京に同行して旅立ち

ます)。*あてきと言ひしは(五条の家に居た童女の時は‘あてき’と言っていたその妹は)、今は*兵部の君といふぞ(今は兵部の君と言う女房で)、添ひて(姫に付き添って)、夜逃げ出でて舟に乗りける(夜逃げして舟に乗り込んだのです)。　*「妹たち」について、注は『集成』からの引用として＜「妹たち」のうちの一人。乳母の娘二人のうちの妹方だけが上京する。＞とある。後述に「姉のおもとは類広くなりてえ出で立たず」とあるので、＜乳母の娘二人のうちの妹方だけが上京する。＞ことになったのは確からしい。が、此処の「妹たち」という言い方で＜「妹たち」のうちの一人＞を言い表している、と言うのでは語句の曲解となる。だから「妹たち」の「妹」が＜姉妹の内の妹＞を意味し、「たち」は＜女房たち＞を意味する、と読まざるを得ない。女房や郎党などの使用人の動向を、その代表者と見なせる人物の動向記事に押し込めるような、こうした「たち」の語用は他所にも在った気がする。今日とは違う主従関係に基づく言い方のようで、分かり難い。　*「年ごろ経ぬるよるべ」の言い換えは＜長年暮らした縁者＞だが、西海道に 16 年暮らして来たのであり、各人各様に思う所は在った筈で、作者の身分を考えても感慨深い一文だ。　*「あてき」は童女の呼び名の一つ、と以前の注にあった。「葵」巻の第二章第八段で葵上の亡き後に、葵上付きの童女に光君が「あてき」と親しげに呼び掛ける場面があった。また、此処で説明される女房は「夕顔」巻の第四章第一段で惟光が五条の家の偵察を光君に報告する話に、頭中将の御車が家の前を通るのを右近に知らせた童女が出て来たが、その子の事かも知れない。問題は、この「あてき」が姉妹の妹なのか他の女房なのかで、注釈では妹と読んでいるようで、私も従う。何しろ「あてき」は「貴君」と表記されるようで、それなりの身分の子に違いない。それに第一章第二段の筑紫下向中の姉妹の会話に、幼い妹を姉が諭すような姉妹の年齢差を感じさせる場面もあった。ただ筑紫下向は夕顔の死の一年後であり、とするとその一年の間に「童女」が「若女房」に成っていたことになるようで、そういう年回りも有り得なくは無いが、五条の家が娘たちの家だったという「夕顔」巻での説明と思い合わせれば、姉妹は本当に二人だったのかも含めて些かの疑念は残る。　*「ひゃうぶのきみ」については、この女房の親か兄弟か夫が兵部省の役人だったことを示しているのだろう。兵部省の職掌は兵員人事と軍事物資の管理かと思うが、であれば駐軍機構である大宰府にも当然に担当官は配置されていた筈だ。そこで、「今は」という言い方に注目すると、この女房は大宰府で兵部省の役人と結婚し、その夫が肥前に居を構えていて、其処に乳母と姫が身を寄せていた、ということかも知れない。ただし、そうした経緯の明示は無い。

大夫の監は、*肥後に帰り行きて、四月二十日(うづきのはつか)のほどに(の頃に)、日取りて来むとするほどに(吉日を選んで新婦を迎えに来ようとしている隙に)、かくて逃ぐるなりけり(こうして逃げ出したのでした)。　*やはり監は肥後に住んでいたのか。とすれば、水路だろうか。が、仮に水路だとしても肥前と肥後なら有明海で、姫一行は唐津湾を出て関門海峡に向かう。

姉の*おもとは(姫の母君の女房を勤めていた姉さまは)、類広くなりて(家族が多くなっていて)、え出で立たず(旅立つことは出来ませんでした)。　*「おもと」は＜女房を親しんで呼ぶ言葉＞とある。夕顔の女房だったことを示している、と読む。となると俄然気になるのは、この姉はもしかすると惟光と情を交わした「若きおもと」だったのではないのか、という興味だ。が、それにしてはこの姉は若すぎるような気もするし、惟光の相手はもっと下位の女房だったかも知れない。ただし、惟光は光君に比べれば取るに足りない身分だが、由緒ある蔵人の家柄の中央役人で、「夕顔」巻で果たした彼の役回りは非常に重要だったのだが、その情交した相手の五条の女については語られず、この巻でもその件は全く話題にならないようだ。

かたみに別れ惜しみて(姉妹は互いに別れを惜しんで)、あひ見むことの難きを思ふに(再会は出来ないだろうと思うが)、年経つる故里とて(妹は長年暮らした土地と言っても)、ことに見捨てがたきこともなし(特に未練はありませんでした)。ただ(ただ、岸を離れる舟の上で夜の闇の月影に見える)、*松浦の宮の前の渚と(鏡神宮前の浜辺の景色と)、かの姉おもとの別るるをなむ

(ついに姉さまと別れる事ばかりには)、顧みせられて(後ろ髪を引かれて)、悲しかりける(悲しんでこう詠んだのです)。　*「まつらのみや」は＜鏡神宮＞。

「浮島を 漕ぎ離れても 行く方や いづく泊りと 知らずもあるかな」(和歌 22-05)

「心許ない 浮島を 離れて行くも 宛ては無し」(意訳 22-05)

*「浮島」は今の唐津城がある満島山(みつしまやま)、とのこと。

「行く先も 見えぬ波路に 舟出して 風にまかする 身こそ浮きたれ」(和歌 22-06)

「宛もないのに 舟出して 闇夜の木の葉 風まかせ」(意訳 22-06)

いと*あとはかなき心地して(姫君は兵部君の歌に同感してこう詠んでは、本当に頼り無い心細さに)、うつぶし臥し*たまへり(嘆き臥してしまわれました)。　*「跡はかなし」は＜跡かた無い、手掛かりが無い、頼り無い＞。　*この敬語で姫と知れる。

[第五段　都に帰着]

「かく、逃げぬるよし(こうして逃げたことが)、おのづから言ひ出で伝へば(自ずと騒がれて肥後に伝われば)、負けじ魂にて(監は負けん気を起こして)、追ひ来なむ(追って来るだろう)」と思ふに(と思うと)、心も惑ひて(不安でならないので)、*早舟といひて(早舟といって)、さまことになむ構へたりければ(特別に櫓の多い舟を豊後介が用意してあったので)、思ふ方の風さへ進みて(追い風も手伝って)、危ふきまで走り上りぬ(姫君の一行は危ぶまれるほどの速さで京へ向かいました)。　*「はやぶね」は大辞林などに＜軍船＞ともあるが、より広義には＜漕ぎ手を多くのせ高速で走る船。＞なのだろう。

*響の灘もなだらかに過ぎぬ(響灘も滑るように過ぎました)。　*「ひびきのなだ」については、注に＜「音に聞き目にはまだ見ぬ播磨なる響きの灘と聞くはまことか」（忠見集）。「響灘」は、今の播磨灘、当時の歌枕。＞とある。が、一般には「響灘」は＜関門海峡の北西海域＞とされ、唐津鏡を出た船なら、先ずは玄界灘を宗像大島に進み、金の岬を過ぎて響灘に入る。そして更に関門海峡を抜けて、西海道から山陽道に入り、周防、安芸、吉備、を経てようやく播磨灘に至る。続く文に、大夫の監の追走を恐れる言及があるので、此処の文は西海道内の記事と考えたい。拠って、此処の「響灘」は筑前の海と見る。

「海賊の舟にやあらむ(海賊の舟なのだろうか)。小さき舟の、飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり(などと上京を急ぐこの一行を見て言うものがありました)。海賊のひたぶるならむよりも(海賊が乱暴に及ぶことよりも)、かの恐ろしき人の追ひ来るにやと思ふに(あの恐ろしい監が追って来るかと思えば)、せむかたなし(そのくらい急ぐ他はなかったのです)。

「憂きことに 胸のみ騒ぐ 響きには 響の灘も さはらざりけり」(和歌 22-07)

「胸の響きにくらべれば 響の灘も名前負け」(意訳 22-07)

*注には＜乳母の歌。＞とだけある。この歌は一行全員の思いだろうから、その代表者として乳母を詠み手と見るのは妥当だろう。ただ、この段の此処までの文意では、主たる主語は「豊後介」なので彼の歌と見ても良さそうだし、話の持って行きようによっては兵部君や姫君の歌だとしても不思議は無い内容の歌だ。いや、だから、この話の運びからすると、歌を導く文の末尾の「せむかたなし(仕方無い)」の「なだらか」さのまま、「響の灘もさはらざりけり」は＜響の灘も何の苦も無く過ぎました＞と、歌ではなく、地文として語り手に語られている、とさえ読める気がする。また、この歌の下句は与謝野晶子訳文に「響の灘も名のみなりけり」とあって、是を地文と読むならば、写本によっては＜名ばかりでした＞というオチになっていることになる。何がオチかと言えば、「響の灘もなだらかに過ぎぬ」が＜舟は一先ず筑前の響灘を滑り抜け＞で、「小さき舟の飛ぶやうにて」が＜そのまま山陽道を急ぎ＞で、「せむかたなし」が＜次いで難なく播磨の響灘に至ってみれば＞で、「響の灘も名のみなりけり」が＜響の灘とは名前倒れの無難さでした＞という語りで、＜「灘」が「無難」＞という言葉の反意オチと、此処の「響灘」が播磨なのだという、前出の注釈が此処の前フリとなる地名オチ。こうして洒落言葉を遊んでいるうちに、舞台は西海道から山陽道へ、それも既に畿内近くに迫る、という作者の話芸。尤も、後に平氏が台頭する山陽道に作者が深入りできない事情でもあったか、山陽道は話の材料が多すぎて別の物語用に温存したのか、はたまたその他の理由なのか、ともあれ山陽道についての記事を省くための苦肉の策でこうした書き方になった可能性も無くは無い。が、それでも上手い仕掛けだ。斯くして、話は一気に進む。

「*川尻といふ所、近づきぬ(淀川口の川尻という所にも近付いてきたぞ)」　*注に＜舟子などの詞。「川尻」は淀川の河口。＞とある。「川尻」を瀬戸内海の地名で検索すると、現在地名では「安芸川尻」が先ずヒットする。が、話は既に播磨灘に進んでいるので、呉市は疾うに過ぎている。で、他を当たると、一般名詞のように思えるこの地名が意外に少なく、直ぐに Wikipedia の難波津のページにある＜「難波浦」の位置については『住吉大社神代記』（年不詳・８世紀前半頃？）に「從三國川尻至吾君川尻難波浦」・「爰三韓國調貢從此川運進。」とある。＞という記事が参照できた。もう少し分かり易い記事が無いかと Web を探すと、「なにわの８０８橋」というサイトの「江口橋」ページに＜江口の地名は「難波江口」と言う言葉からでたもの、淀川を上下する川舟と瀬戸内海を往来する海舟が、乗り換えする場所で、「大川尻」とも呼ばれ、菅原道真の詩や紀貴之（キノツラユキ）の日記等が残る。＞という説明があって、一応は地理上の見当が付く。今で言えば、東淀川区と摂津市との境で、当時は如何に入り江が深かったかを思わせる。

と言ふにぞ(と漕ぎ手らが言うので)、すこし生き出づる心地する(一行は、もう京も近いと少し生き返った心地がします)。例の(いつものように)、舟子ども(ふなこども、漕ぎ手たちの)、

「*唐泊(からどまり)より、川尻*おすほどは(川尻まで漕ぐ間は)」　*「唐泊」は注に＜舟子の唄う船歌。「唐泊」は今の姫路市的形町福泊かとされる。ここから淀川の河口まで三日の行程。＞とある。　*「押す」は此処では＜櫓を押して舟を進める＝漕ぐ＞。

と歌ふ声の(と舟歌を歌う声が)、情けなきも(雅な京風でないのが却って)、あはれに聞こゆ(感慨深く聞こえます)。豊後介、あはれになつかしう(しみじみと田舎が懐かしく)歌ひすさみて(その歌をつられて口ずさんで)、

「いとかなしき*妻子も忘れぬ(うかうかすると川に押し戻されて進まないので必死になるから、可愛い妻子も忘れてしまう)」　*「妻子も忘れぬ」は普通は女遊びを意味するし、繁華街を目指して漕ぎ手が

景気付けに歌う労働歌なら尚更だ。ただ、それを豊後介の心情とするのは相応しくなさそうに思えるので、此処の補語は、かつての難波江口が今の新淀川河口からかなり遡る事からの当てずっぽうで都合した。

とて(とその文句を言ってから)、思へば(考えてみると)、

「げにぞ(本当にその通り)、皆うち捨ててける(私は妻子を皆うち捨てて来てしまった)。いかがなりぬらむ(如何している事だろう)。はかばかしく身の助けと思ふ郎等どもは(優れた役に立ちそうな郎党どもは)、皆率て来にけり(皆連れて来てしまった)。我を悪しと思ひて(監が私を憎んで)、追ひまどはして(残してきた妻子を追い困らせて)、いかがしなすらむ(どんな危害を加えるか知れない)」と思ふに(と思うと)、

「心幼くも(浅はかにも)、顧みせで(家族のことを考えずに)、出でにけるかな(出て来てしまったものだ)」と(と畿内に入って如何やら逃げ遂せたようだと)、すこし心のどまりてぞ(やっと一息吐けた今になって)、あさましき事を思ひ続くるに(早まったかと後悔し続けて)、心弱くうち泣かれぬ(気弱になって泣けてきました)。

「*胡の地の妻児をば(このちのせいじをば)虚しく棄て捐てつ(むなしくすてすてつ)」　*この漢文は、注に＜豊後介の口ずさみ。「涼源の郷井をば見ること得ずなりぬ胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」（白氏文集巻三、縛戎人）。彼の漢籍に対する教養が窺える。『完訳』は「豊後介の、筑紫の妻子を捨てて都人にも迎えられぬのに重ねられる」と注す。＞とある。「白氏文集巻三、縛戎人(ばくじゅうじん)」がアンチョコ出来るサイトを検索したが、上手く探せなかった。が、「源氏物語＜妄想モード訳＞」というサイトの当該部分の訳文ページの「語釈」に、この漢文の解説があった。孫引き以上の出典不明になりそうだが、解説自体は説得力の有るもので、他に手頃な資料も無いので、このページに全面依存する。結論としては、この豊後介による引用一説は「異国に長年暮らせど、異国人になりきれず土地の妻子を残して帰国したものの、帰国すれば異国人と見なされる」という内容の詩句の一端とあり、自分もこの「縛戎人」と同じ＜遂に安住の地を得られない者＞かも知れないと、帰国を目前にしてこそ深まる豊後介の複雑な不安を表している、ということらしい。

と誦ずるを(と豊後介が白居易の漢文を呟くのを)、兵部の君聞きて、

「*げに(確かに考えてみれば)、あやしのわざや(大変な事をしたものよ)。年ごろ従ひ来つる人の心にも(長年従って来た夫の心にも)、にはかに違ひて逃げ出でにしを(急に背いて逃げ出してきた事を)、いかに思ふらむ(どう思っていることだろう)」と、さまざま思ひ続けらるる(さまざまに思い続けずには居られません)。　*「げに」と兵部君が豊後介に共感する事について、注は＜以下「いかに思ふらむ」まで、兵部の君の心中。女房ながらも『白氏文集』「縛戎人」の詩句が理解できるとは、かなりの教養である。＞とある。ところで、兵部君と豊後介はどちらが年上なのだろう。兵部君の方が上のようにも思えるが、いずれ年の差は近いような気はする。兵部君は 16 年前の筑紫下向の時に裳着の 13 歳だったとすれば今は 29 歳。乳母子兄弟の年齢差を 2 歳づつと見て、姉は 15 の 31、豊後介は 11 の 27、次男は 9 の 25、三男は 7 の 23、くらいだろうか。いや、余談の予断。

「帰る方とても(帰る所といっても)、そこ所と行き着くべき故里もなし(京には何処と決まった落ち着ける自邸も無い)。知れる人と言ひ寄るべき頼もしき人もおぼえず(知り合いだと言い寄

って頼れるような人も思いつかない)。ただ一所の御ためにより(ただこの姫君お一人のために)、ここらの年つき住み馴れつる世界を離れて(自分たち自身の長年培ってきた暮らしを捨てて)、＊浮べる波風にただよひて(浮かべた舟に乗り込んできたものの、その舟が波風に漂って来た様に)、思ひめぐらす方なし(この先に確かな方策を思い巡らす方法も無い)。この人をも(この姫君にしても)、いかにしたてまつらむとするぞ(どのようにして内大臣に奉れば良いものか)」　＊「浮べる波風にただよひて」は如何にも歌語風な言い回しに思えるが、特に注釈も無く、単に文脈のままに重ね読む。

　と、あきれておぼゆれど(途方に暮れたが)、「いかがはせむ(何とかする他は無い)」とて、急ぎ入りぬ(一行は急いで京の町へ入ったのです)。